

## 三十八度線を越えて

長崎県 友永倬夫

### 一 北朝鮮・清津に生まれて

昭和十一（一九三六）年清津府弥生町で生まれた私は、今様に言うならば在鮮三世である。

その系譜をたどれば、肥前の島原出身の祖父と長州の熊毛郡束荷村の庄屋の娘だった祖母たち夫婦は、清津開港の明治四十一（一九〇八）年ごろに当地に移住し、祖父はブリキ店を営み、祖母はそのころ既に結成されていた清津日本人会の婦人たちに、華道や茶道を教えていたらしい。

明治四十三年の韓国併合によって、総督府施政に伴い当地が「清津府」に改められたころ、島原に残っていた尋常小学校四年生の父も、島原から清津府大和町に呼び寄せられている。時代が大正に入ると、従兄弟を呼び寄せ、また親戚の小学生二人をも引き取って面倒をみていた。そのうちの

一人は羅南中学校第一回生として卒業し、のちに松本組に入社させたし、もう一人は満州国の林口<sup>リンコウ</sup>にて酒店を営ませた。さらには羅南の知人から養女を迎えて清津女学校を卒業させたが、この人は年若くして夭折してしまった。

祖父はまた、大正の終わりから昭和の初めにかけて清津府の府会議員を務めていたが、特に結成当時から関わっていた清津消防団の組織、装備、設備の充実に大いに尽力していて、敗戦時には副団長として警防団本部に最後まで踏みとどまり、手塩にかけて育てた思い出のある団三十有余年の終焉を自ら見届けたうえで、日ソ両軍の戦火飛び交う中を、夕闇に紛れて清津を脱出したとのことである。

とにかく祖父には、終戦まで「朝鮮・友永兼次郎殿」と書かれただけの宛先で、内地からの手紙類が届いたという逸話が残っているくらい、清津の古顔として名の知られた存在だった。

一方父は、高等科卒業後、商売を志望して大阪

の船場で修行したのち、大正十（一九二一）年佐賀の歩兵第五十五連隊に入隊、精励恪勤して伍長勤務上等兵で除隊後、清津に戻り大和町にて金物店を開業した。

大正十五年には同郷の母と結婚した。昭和初期、店舗拡張のため弥生町二番地に店舗を新築して移転した。昭和七年には兄が出生したが、四十数日で死んでしまった。昭和十一年に私が、同十五年に弟が、さらに十八年には妹が生まれ、弟妹三人となった。

私が物心ついたころには、祖父のブリキ店は従兄弟に譲り、商売は父に任せて祖父母は隠居身分となり、もっぱら警防団や中華料理店や、小作をさせていた中国人たちの面倒を見ながら、土地や借家の管理をして過ごしていた。また祖母は副会長として清津愛国婦人会の世話をしていたので、我が家は相変わらず人の出入りが多く、日本人ばかりでなく中華料理店主の京さんや小作人の王さん一家、それに材木商の李さんなどがしょっちゅう

訪れてきては、一緒に食事などをしていた。

昭和十二年支那事変勃発、十三年張鼓峯事件、十四年ノモンハン事件、そして十六年の大東亜戦争と出生以来次々と起きた「昭和の争乱」の中で育った私は、幼いころから兵隊ごっこやちゃんばらごっこに打ち興じていた。あるとき在郷軍人会幹部だった父に連れられて連隊対抗の市街戦演習を見に行ったことがあったが、私はそれに興奮して、戦車の市中行進を追いかけて感動したものだ。また、講談社の武者物語、歴史物語などを読みあさっていた。清津公立国民学校に入学したころは、「海の零戦」「陸の隼」に触発されて模型飛行機作りに熱中し、雑誌「海軍」と「若桜」を熟読するなど、「神州不滅」を固く信じる「軍国小国民」であった。

昭和二十年になると、内地、朝鮮、満州を結ぶ物資の流通拠点である清津でも物不足は深刻化し、食糧事情にも一抹の不安が漂い始め、経済統制は一段と厳しくなってきたが、我が家では統制

品だったマッチと石鹼を一手に扱っていたし、店頭には世情を反映して、ジュラルミン製の鍋釜や弁当箱の代用品などを陳列していたが、商品倉庫にはアルマイト製の鍋や弁当箱、鉄瓶、鉄釜などの商品が多量にストックされていて、品不足の心配などは全く無かった。

食糧に関しても、米が日常の常食で配給の雑穀はほとんど食べることなく、学校に携行する救急袋に葉や包帯と一緒に煎米と煎大豆の中に、母が箱入りキャラメルや板チョコをいつも忍ばせてくれていたし、おやつには世間一般はどんぐりパンの時代に、餡パンやカステラという贅沢な暮らした。

## 二 ソ連の参戦と清津脱出

昭和二十年八月九日。その日の清津はことほか暑かった。

発令されていた警戒警報が解除されて間もない午後の三時ごろ、弟と海岸通りに出て遊んでいると、頭上から突然爆音が襲ってきた。反射的に空

を見上げると、低空で突っ込んでくる爆撃機の編隊が見えた。驚く間もなく地上から応射する対空機銃が一斉に火を吹いた。何事が起きたのかわからないまま、天と地で交錯する銃声にびっくり仰天した。二人は脱兎のごとくに家へ逃げ帰り、祖母が放り出してくれた布団の下に、家族全員体を小さくしてうずくまった。すさまじい炸裂音が聞こえる度に、家屋が不気味に揺れていた。三十分ぐらいすると音がとぎれたので、このすきに電気会社裏の防空壕へ逃げようと階下に下りると、出入口のガラス戸は全部破壊されていてガラスが飛散し、商品は全部棚から吹き飛ばされて床に転がっていた。しかしひるむ暇もなく外に飛び出して、ガラスの破片と瓦礫が散乱している舗道を、夢中で走り防空壕に飛び込んだが、カビ臭い壕内では突然の空爆のショックのせいかわからない。黙りこくって言葉も発しなかった。敵機が去った夕方、夜間空襲の危険を避けるため、黒煙があがっている港湾施設を眼下に見ながら女学校の横穴壕へ移

動し、そこで一夜を明かした。

翌朝、ソ連の参戦を知らされ、昨日の空襲がソ連機だったことを知ったが、さしたる驚きも動揺もなく、数日後にソ連軍が侵攻してこの地が戦場になるうとは、夢想だにしなかった。しかし母は、父が四月に召集を受けて釜山に出発する際に言い残した、「万一、ソ連が参戦したら清津はたちまちのうちに戦場になるから、そのときはすぐに南朝鮮方面へ避難するように！」との指示に従い、隣の夏川小間物店の家族と共に南朝鮮の太田へ移動することを手配したが、空爆による列車ダイヤの混乱で、切符の入手が遅れてしまった。

八月十三日の払暁、女学校の横穴壕から常盤町のいとこの家に避難していた私たちは、「ソ連軍小部隊が、灯台付近に上陸。我が守備隊と交戦中！」との知らせにたき起こされて、再び近所の人たちと共に清津神社の裏山に退避したが、一時間ほどしたら「我が守備隊が撃退した」との連絡を受けたので、母は妹を背負い祖母の姪のイサ

子姉を連れて下山し、南下準備のために弥生町の家に戻った。

私と弟と祖母の三人は、常盤町の家で一息入れているところに切符入手との知らせがきたが、空爆で電話は不通となっていて母との連絡が取れずに、仕方なく三人で急いで自宅へ向かった。小走りに駆けて家に着いたが、そこにはもう母たちの姿はなかった。常盤町へ引き返したらしかった。夏川の家族は、時間がないので既に駅へ向かったというので、母たちとも駅で待ち合わせることにして、荒れ果ててしまった家に入り必要な荷物をまとめてリヤカーに積み、駅へ向かって走った。

天馬山下辺りから、避難する人々の数が増え始めて、駅前広場に着くころには押し寄せた群衆があふれて大混乱になっていた。みんなの目は血走っていた。連絡されたとおり、混雑の中を駅長室へ行き、切符を受け取り駅舎の前で母たちを待つが、なかなか見付からない。そのとき突然砲声が聞こえた。今度は、空爆ではなく艦砲射撃だった。

「ソ連軍が上陸して来るぞ！」との叫びが聞こえた。天馬山の山かげから盛んに噴煙が上がっている。「清津市街は火を放って自爆を始めたぞ！」と口々に叫んでは、避難民が続々と広場に駆け込んできた。いんいんとして響く砲声の中で、駅のマイクがなりたてて、改札が始まった。取りあえずホームで母たちを待つことにして、人混みにもまれながら改札口を出た。

京城（ソウル）行きの列車が入り、緊張の面持ちで予約車両の前に並んだときに、やっと貨物用の入口から母たちが駆け込んだのでほっとした。これで、家族揃って車中の人となることのできた。緊張感が一度に切れて、虚脱状態になっていた。やがて通路まで詰め込んだ満載列車は発車したが、ふと気が付くと南ではなく北へ向かっていた。海岸線は交戦中なので、経路を変えて輸城を経由して羅南へ出るのだろうか、みんなは勝手に合点していたが、そんな車中の予想もむなし、列車は間違いない北上し富寧で停車しそこで一夜

を明かした後、翌日は茂山駅に着き、さらに奥地へ向かい、木材積み出し用の引込線のような駅舎はもちろん、人家すら見あたらない河畔に客車を置き去りにして、機関車は茂山駅へ引き返して行った。車窓から大河が見えた。だれかが豆満江だと言っていたが、とすれば対岸は満州領ではないか。南下したとしても戦火が収まり次第、再び清津へ帰れるものとこれまで樂觀していたのに、一転してこんな北辺の山岳地帯へ運び込まれるなんて、先行きどうなるのか不安な気持ちに包まれて、その夜はまんじりともできなかった。

翌日、陽が傾きかけたころになって機関車が迎えにきて、我々は茂山駅に引き返すことができた。茂山駅のホームには、人々を満載した貨車が次々と入線してきて、構内は避難民の群れでごった返していた。ここで我が家に奇跡が起きたのである。駅の洗面所に水くみに出た祖母と、水を飲みにきた祖父がばったり出会ったのだった。清津から一人で行動してきた祖父が、この混乱の中で祖母と

ばったりと会うことができたとは、人智の及ばぬ夫婦の絆というか、運命の不思議さを感じさせた。

その日、白茂線の列車の手配がつかないので、延社まで徒歩で進むという避難命令が出たが、そのころには既に夕闇が迫っていた。徒歩で延社に向かう集団は、その数約七、八百人、日本人ばかりでなく朝鮮人家族も相当数混じっていた。統率者がいるわけでもなく、まるで野火に追われる蝗の大群にも似た逃避行となった。

一夜目は野宿、二夜目は寒村の学校の教室で、三日目は、朝鮮農家に宿泊しながら約四十キロメートルの山道を踏破して、四日目の午後にやっと延社に着いた。早速、祖父は警察へ行き状況をたずねると、「清津方面のソ連軍とは目下停戦状態にあり、やがて停戦協定が締結されるだろうが、詳細は不明である。避難民は白岩に集結することになっており、列車輸送の予定だが、機関車の手配が遅れているので、駅で待機していて欲しい」と教えてくれた。退避線に停車していた無蓋貨車

にすし詰めになったままで迎えを待つことになった。そんな所に戦場を離脱してきた兵隊たちや、疲れた足取りで続々と集まって来る避難民の間からは、「日ソ戦は停戦ではなく、日本が無条件降伏したらしい」という、信じ難い情報が流れてきた。しかし大多数の人々は、敵が流した流言飛語ではないかと言っていて、半信半疑の状態だった。

三日ほど待つてやっと迎えにきた小型機関車は、避難民を満載した貨物列車を引いて山峡を縫い、急坂を息も絶え絶えに登って、高原の駅白岩に着いた。

八月二十五日。日本の敗戦が本当であることが伝わると、街の様相は一変した。朝鮮人の家の軒先には、どこでどう準備していたのか、太極旗が一斉に掲げられて、街中には「マンセー、マンセー」の歓声がこだましていた。一夜にして朝鮮は他国となり、我々は敗戦国民になったのである。また、この日には武装解除の命令が出て、祖父も今まで大事に携行していた、家に伝わる日本刀を

役場へ提出に行った。

八月二十六日には、イワノフ少佐の率いるソ連軍が白岩に進駐してきたが、初めてソ連兵を間近に見ることとなった。白系露人しか知らなかった私は、銀髪、金髪、茶髪、そして黒髪というソ連人の多民族性に驚いた。

後日、このときの通訳のソ連軍将校が、明治町で父親が洋服屋を営んでいた私と同級生のヤンコスキー君の叔父さんだったということを聞いて、あの一家はロシア革命を逃れて清津にきたのだと聞かされていただけに、何か釈然としない思いがしたものだ。

夜になると、敗戦国民となった我々に恐怖が襲ってきた。酒気を帯びて、毛むくじやらかな腕にマンドリンと称する自動小銃を抱えたソ連兵が、集団で「ダワイ！ ダワイ！」と叫びながら町の中を襲っていた。戸外では、ときおり銃声が響いていた。我々は、分宿していた鉄道官舎で身を潜めて、恐怖の一夜を明かした。

翌二十七日。昨夜のあのソ連兵の暴虐ぶりを知り、さらにこの山間地に何万もの人間が留まっていたのは、食糧が枯渇するだろうとの不安から、吉州方面への南下が話し合われた。赤ん坊を背に幼子の手を引いた避難民の群れは、長蛇の列をなして線路沿いに南を指して落ち延びて行った。その足取りは葬列のごとく、暗くて重たかった。吉州まではおよそ七十キロメートルで、進む鉄路は苛酷だった。幾重にも続くトンネルの長い暗闇。

峡谷に架かる幾つもの鉄橋。そして枕木に渡された細い板のうえを進むのだが、谷底をのぞけば目がくらむし、立ち止まると足がすくむので、ただ前だけをにらんで渡っていた。「ソ連軍の軍用列車が来るぞ！」と声が掛かると、列車から自動小銃を乱射されでもしたらという恐怖感におびえては、線路脇の土手を駆け下り草むらに身を隠していた。このような有様で、避難民の群れは昼間は炎天にさらされて汗だくで歩き、日が落ちれば川原や無人小屋で体を寄せ合って、深々として

伝わってくる山の寒気から身を護りながら一路南下して行った。

明日はいよいよ吉州に着くという前夜、幸いにもある地主の屋敷に泊めてもらうことができて、久しぶりにゆつくりと手足を延ばして休んだ。翌朝、出発に際してその家の主人から「吉州ではソ連兵の暴行略奪が激しいと聞いているから、迂回して鶴東面へ出る方が良策ではないか」と忠告してくれて、さらに「お子さん連れで大変でしょうが、無事日本へ帰国してください。そのうちに平和が回復すれば、また日本と往きができる日も来るでしょう」と、流暢な日本語で励ましの言葉で送ってくれた老主人のことは今でも忘れられない。

吉州の街を遠望する辺りから脇道に入り、しばらく進んで鶴東川を徒渉し街道に出ると、迂回してきた人々の数は増え列をなした。

業徳の街の入口で初めて保安隊の検問に遭った。言葉遣いは乱暴だが、取扱いは石鹼やマッチを没

収した程度で済み、業徳駅から城津へは日本人を列車で運んでいるから急いで行けと言われて、小走りですぐ向かった。停車していた貨物列車に一斉に押し寄せる人混みにもまれながら、家族全員はどうにか乗り込むことができたのは幸いだった。

### 三 暴虐の街・城津と憂愁の街・咸興

城津駅に着き、押し合うようにして駅前に出ると、ソ連兵が戦車の天蓋から身を乗り出して、日本人を見下している。戦車を取り囲んだ朝鮮人の群衆が赤旗を打ち振りながら「マンセー！ マンセー！」と熱狂的に叫んでいた。それを横目で見ながら、侮蔑と報復の目に追い立てられるようにして、城津駅機関庫に向かった。だっ広い庫内は薄暗く、コンクリートの床の上に<sup>かまき</sup>吠を敷いて寝起きしている先着の避難民でごった返していたが、女性たちの顔は一樣にすすけていて陰気臭かったが、ソ連兵の暴行から逃れるために、鍋墨を塗ってわざと顔を汚しているということを知ったのは、その夜のことだった。我が家も吠を手に入れて寝

場所を確保し、最初の夜を迎えた。うとうとしていたが、突然の赤ん坊の泣き声で目が覚めた。するとすぐに声がした辺りから、一斉に「ワアー」という大きな叫び声が上がった。驚いて薄明かりの中を透かして見ると、マンドリンを腰だめに構えたソ連兵が四、五人、避難民の寝ている所に入って「ダワイ！　ダワイ！」と叫びながら荷物を手当たり次第に掻き回して、めぼしい物を物色し奪っている。別の方向から避難民の「ワアー」という喊声があがると、ソ連兵は声のする方に向かって銃口を向け大声でわめいた。すると途端に喊声をやみ、騒ぎは静まったが、ソ連兵の略奪は続いていた。ソ連兵のそばの人は声も立てられないので、離れた場所にいる人たちが一斉に叫声をあげることが、無力な避難民の間で取り決められた唯一の牽制手段なのだった。

そのうちに、夜ばかりか白昼堂々と「シギ、ダワイ！（時計を出せ）」とか「マダム、ダワイ！」とか叫んで侵入し始めた。物盗りだけではなく、

女性を求めようになってきた。女性がトイレで襲われたとか、戸外に出た途端に拉致されたとか、不穏な話が頻発し始めた。女の人は鍋墨で顔を汚すぐらいでは危険なので、黒髪を切って丸坊主にし、だぶだぶの男物の服を着て男装する娘たちが増えてきた。

一週間ぐらい経ったころ、十数人の日本人が拉致され海岸で銃殺されたという、戦慄的な情報も流れてきた。はじめのうちは、殺されたのは元憲兵と元警察官だったらしいが、いや鉄道の人たちもだとか、女性も二、三人強姦されたあとで始末されたらしいとかの噂話が伝わって、人々は恐怖のどん底にたたき込まれた。この事件の犠牲者は、後日この事件を取り上げた藤田フジエさんの『地獄よりの生還』という本によると、城津駅の鉄道関係者六人の方々だったというのが真相だったらしい。

征服者の立場になったソ連兵の蛮行に痛めつけられながら、大豆やジャガイモ、ときには野草混

じりの雑炊を啜りながらの日々を過ごしていたが、それが原因となって下痢患者が続出し、朝起きてみると機関庫周辺は下痢便で埋めつくされているという劣悪な衛生環境の中で、ひたすら南下を待っていた我々に輸送列車の運行開始が伝えられたのは、九月も二十日を過ぎていた。そして我が家の出発は第三陣で、二十二、三日ごろだったと思う。

四時間余り、すし詰め貨車で揺られて咸興に着くと、またしても「ダワイ！ ダワイ！」と叫んで威嚇するソ連兵の銃口に誘導されて、駅前広場に集められた。ここでは既に八月下旬に、「咸鏡北道避難民会」が組織されていたそうで、その会の係員に案内されて武徳殿へ向かった。そこでの話では、一度南下した列車がソ連軍に越境を拒否されて、鉄原から北へ逆送され、その一部は元山で下車させられたが、およそ二千二、三百人の者は再び咸興へ帰ってきたらしい、ということだった。幸いに、その日のうちに会の世話で朝日町通り

の相馬旅館に宿所が決まり、弥生町の玩具屋の矢吹一家と相部屋になった。旅館の主人に、気になっていた街の治安についてたずねると、ソ連軍進駐一週間ぐらいは、日本人住居襲撃が頻発していたので、屋根の上や天井裏へ逃げ隠れしたそうだが、最近は取締りが厳しくなってきた、街は平静を保っているとのこと、城津との違いを知って安心した。

九月末ごろになると、咸興の避難民は一万七千人を越えていて、郊外に食糧調達に行った祖父の話では、城川江に架かる萬歳橋の下で野宿をしている人たちが大勢いたらしい。虱の発生に悩まされ始めたのも、このころからだ。虱の繁殖ぶりはずさまじく、日中には衣類の折り目や縫い目に隠れている虱をつまみ出して、爪で文字通り「シラム潰し」にするのだが、夜になるとまたどこからともなくやってきては、古巣に戻って生き血を吸うのである。やがてこの寄生虫が原因で、極度の疲労と栄養失調で衰弱しきっている避難民の間

では、「再帰熱」という伝染病が猛威を振るい始めて、咸興の街は死の影に脅え、沈うつと憂愁の暗雲に覆われていった。

燎原の火のごとく広がっていたこの熱病が、ついに我が家にも飛び火してきて、まず私が発病したのは十月の半ばごろだった。罹患して治癒するまでの二週間ぐらいの間の記憶は、高熱と下痢に冒されていたせいだろうが、全く空白で思い出せない。ただ耳が全然聞こえず、会話ができなかったことだけは覚えている。

回復したあともしばらくの間は、髪の毛が全部無くなるのではないかと心配するほどポロポロと抜けたので、「脳までやられたのではないか？」と母が心配したということも無理なからぬことだったと思っただ。

私が病に伏せている間にも、病魔は宿舍全体に広がり、我が家でも全員が発病したが、幸いに妹を除いてはみんな軽症で済み、一週間ほどで回復した。看病といっても医薬品があるわけではな

く、お粥に野菜スープかりんごジュースで栄養をつけ、あとは寝かせておくしか手だてはなかった。

母の徹夜続きの看病もむなしく、一時小康を保っていた妹の容態が急変して、母の乳房にすがったまま息を引き取ったのは、十一月十七日の明け方だった。その日の午後、妹の遺体は、それまでの度々の略奪からも母が密かに隠し通していた赤い花柄の着物で着飾られて、遺髪だけを残して祖母の背に負われ、祖父に伴われて墓地へ向かった。母も我々兄弟も祖父母に諭されて同行しなかったので、埋葬した場所は分からない。享年三歳。読経も無く寂しい野辺送りだった。

十一月末ごろから死亡者が激増し始め、我々の宿舍からも数人の犠牲者が出たが、特にひどかったのは元遊廓街にすし詰めに押し込まれていた人たちの間で、死者が多かったことで、一家全滅という悲報が相次いで聞かれた。

やがて、疫病に呻吟する避難民たちの身の上にも、北朝鮮の苛酷な冬が情け容赦なく訪れてきて、

十二月を迎えた。その夜、突然我が家にも、富坪という名も知らぬ土地への移動が伝えられた。

#### 四 富坪での惨劇

昭和二十年十二月二日。突然伝えられた富坪への移動命令によって、ソ連軍監視兵によるマンドリン包囲網の中で集合した三千二百八十二人の避難民は、無蓋貨車にぎっしりと詰め込まれて、寒風吹きつける中を富坪へ向かった。

たどり着いた富坪は、日本軍の演習場の兵舎だったらしく、小高い丘の上に九棟の木造の建物が並び、丘の下を流れる小川の向こうに見える冬野は、荒涼として物悲しい風景であった。しかも、建物の窓ガラスは破損し床は荒れ放題で、暖房設備などは全くないし、炊事施設すら見当たらなかった。こんな所で、極寒零下十数度を下回る厳しい冬を過ごすのかと思うと、前途は暗澹たるものだった。朝鮮人民委員会でも、当初からこの悪環境下で三千人もの集団の越冬は無理だと判断していたらしく、隣接部落への出入りは自由に、事

情の許す者には、近隣町村の農家に手伝いに出ることを許可していた。我が家では、イサ子姉が隣村定平の農家に行くことになった。我々の宿舎からは、ほかに数人が分散生活のために出て行った。

ところがその数日後に、一転してソ連軍より收容区域からの外出禁止令が出され、捕虜並に身柄を拘束されてしまい、わずかに配給される大豆粕以外には、自分での食糧調達の手段を絶たれてしまった。

富坪に收容されて旬日が過ぎたころ、恐れていた猛吹雪が襲ってきた。飢餓、栄養失調、再帰熱で衰弱し切っているうえに、ほとんどの者が夏着のままの避難民にとつて、この寒波は凶器にも等しかった。死者が続出し、その遺骸は吠に包まれて裏山に土葬されていた。

本人は私たちに隠すように装っていたが、数日前から体がだるそうにしている母が、突然私を散歩に誘ったのは十二月十八日の夜だった。その夜は風もなく、寒天には満月が冴え、皓々と照らす

月光が積雪に映えて明るかった。「きれいなお月さんだね！ きつと父ちゃんは先に島原へ帰って、この月を見ているよね」などと父への思いを語りながら歩いていた母が、突然立ち止まり私の手を握って向き合おうと、「あなたはお兄ちゃんだから、これから先何が起きようとも、必ず生き延びて島原へ帰るのだよ！ 頼むからね！」と、真剣な眼差しで諭すように話し出した。「僕は大丈夫だから。みんなで頑張って島原へ帰ろうよ！」と答えると、母は「それを聞いて安心した。きつとだよ。約束したよ！」と、いつもの母には似合わずに、しつこく念を押すように言って微笑んでくれた。

母の容態が急変したのは、翌十九日の昼前だった。外にいた祖父と弟と私の三人が、うろたえた祖母の声に慌てて母の枕辺へ駆けつけたときには、既に母の顔は蒼白で、意識は混沌として口もきけない状態だった。このとき、隣で起居していた方が「心残りのないように」と言われて、隠し持つておられた最後の一本のカンフル注射を打ってく

ださった。あの異常な環境下で、思いもよらぬ医薬品を頂いた恩人の名前を失念して、長年胸奥につかえていたが、後年、清津にいた親戚の松本の姉との思い出話の最中に、突然に「牧山」という名を思い出し、それからつてを求めたところ、大和町の「牧山病院」の奥様だったことが、実に三十七年目にして判明したが既に亡くなられており、積年の感謝の思いを込めてご冥福を祈った。

母はとうとう帰らぬ人となり、通夜もなく吠に包まれた遺体は祖父母に伴われて、夕日の傾く丘へ運ばれていった。幸いにその日は好天で凍土が緩んでいたので穴を掘り土中に埋葬することができたとのことだった。享年三十八歳で、突然でありにも呆気ない母の死だった。

母の死の前後から、各宿舎から運び出される遺体は連日あとを絶たず、あまりの多さに吠が不足してきて、遺体を完全に包むことができず、足がはみ出したまま運ばざるを得ない状況になっていた。しかも、飢えと寒さと病魔で搬出作業がで

きる男手は減り、そのうえ積雪が深く地面は凍土となつて土中に埋葬できないので、雪解けまで雪をかぶせるだけで放置するという、この世での地獄図が出現するようになった。北風ほえる丘陵を覆う氷雪が、望郷の念を抱きつつ異郷に斃れた人々の碑銘無き墓標となつていた。

一月の半ばを過ぎたころから、やつと日本人世話会からわずかながら食糧の配給が行われ、若いころにブリキ職人だった祖父が中心となつて、六、七人の経験者で工務部を組織して、支給されたドラム缶を改造してストーブを造り、煙突をつけて各宿舎に暖房器具として配置したが、それでも四月までの死亡者は千四百三十一人となり、北朝鮮難民最大の犠牲者を出したのである。

北朝鮮にも遅い春が訪れる四月になり、積雪が消え野山がもえ始めると、暗い宿舎に幽閉されて息を潜めて生きていた人々は、食用の野草を求めて一斉に野山に出た。死からの解放感と生への希望に満ちて、どの顔も明るくなった。我が家では、

定平の農家でひと冬を過ごしたイサ子姉を祖父が迎えに行き、無事に帰ってきた。

自然の蠢動と共に、破損したまま放置されていた浴場を、祖父たち工務部が修理し、分会毎の入浴もできるようになった。蒸気釜を装備した特殊車両を持ち込んだのソ連軍による虱駆除の実施、四、五キロメートルほど離れた山で切り出した丸太を担いで運び、ソ連軍へ引き渡す労賃作業の開始など日常の生活にも人間らしさを取り戻す変化が起こった。また、有志によつて演芸会が催され、忘れていた笑いと歓声を思い出し、大いに盛り上がったものだった。

しかし明るい話題ばかりではなかった。夜毎に裏山を火の玉が飛び交つていた。凍結のため土中に埋葬することがかなわずに、氷雪に閉ざされて眠っていた数百の遺体が、雪解けと共に露出し青光を発し、人魂となつて漆黒の夜空を浮遊するらしかった。とりあえず、男手によつて遺体の埋葬整理が行われた。二十坪ほどの穴を掘り、その中

へ遺体を幾重にも並べ、そのうえに土をかける。大きな土饅頭は八つを数えたと聞く。もちろん墓標などは無い。

この埋葬作業が四月末ごろに終わるのを待って、五月五日には松の木を削って「嗚呼戦災日本人の墓」と刻み、裏面に「この地に死亡した日本人千四百三十一人の冥福を祈り残留日本人之を建つ」と書いた墓碑の前で合同慰霊祭が行われ、僧侶もいて読経のあがる中、祖母が五分会を代表して焼香をしたが、参列した者はみんな泣いた。このとき、初めて祖父母から母の埋めた所を知らされた。整理された共同墓地から少し離れた土盛りの下に眠っているとのこと、寂しさもひときわ哀れであった。

慰霊祭が終わったところから、避難民の南下をソ連軍は黙認するらしいとの情報の流れ、富坪脱出がささやかれ始めた。そんなところに突然、列車で南下させるとの保安隊の指示が出て、収容されていた数十人の孤児全員が、先発として富坪駅へ

向かって出発して行った。これを知って、我が家でも単独で脱出することを決め、食糧を貯え荷物を整理して機会を待つこととした。

決行前日に母の墓へ最後の別れに行き、地獄の富坪を脱出し南へ向かったのは、昭和二十一年五月十日の夜明けだったと思う。

#### 五 三十八度線を越えて

新上の町に入り、付近の部落を迂回し山路に入った。その日は山の中の農家に宿をこい、泊めてもらった。翌早朝に出発して歩いてしたが、昼ごろだったろうか、高原の町からの帰りだという髭の老人に出会った。老人は私たちを呼び止めて、「昨日高原駅で日本人を乗せた列車が南へ向かうのを見た。ここからだとゆっくり歩いても夕方には着けるから、駅へ行ってみてはどうか」と、たどたどしい日本語で親切に話してくれて、駅への道順を教えてくれた。この言葉に幾重にも礼を述べて、教えられた道を急いだ。

夕暮れ近くにやっと高原駅にたどり着き、すぐ

に駅舎をたずねると、年配の駅員から「間もなく日本人を元山へ運ぶ列車が到着する。五人ぐらいならば乗れるだろうからホームで待ちなさい」と教えられて、しばらく待つうちに避難民を満載した無蓋貨車が入線してきた。車上から引き上げられ車枠をよじ登って、どうにか家族全員が乗り込むことができた。

星空の下を一時間ほど走って元山に着いた。世話会の人に案内されて東本願寺に落ち着いたが、先着の人たちに私たちが加わり、混雑している本堂の片隅で休息しているときに、思いがけないことが起きた。それは、会寧にいた叔父が突然に現れたのである。驚いた私は思わず叔父に飛びついたが、気持ちが高ぶっていて涙が止まらなかった。先着していた叔父は、咸興方面からの避難列車が到着して、人々は東本願寺に収容されていると聞き、ひよっとしたら私たちがいるかもしれないと、数日前から幾度も幾度もここへ足を運んでいたのだという。すぐに叔父たちの収容先へ向かい、叔

母と久美子姉に再会した。お互いの無事を確かめ合ったが、喜びで声も出なかった。

安心して落ち着いた日々を過ごすうちに、世話を中心に列車による集団脱出の計画が進められ、家族毎に必要な脱出資金が集められた。ソ連軍や保安隊との交渉が進展して、百余人の集団で南下列車に乗車したのは、六月の十日前後だった。列車は客車で、朝鮮人乗客も同乗しているものだった。

順調に三時間ほど走っていたが、昨年はこちらから北へ逆送されたという鉄原駅を通過したが、何事もなく、この分なら国境近くまで行けるかもしれないと淡い期待を抱いたのも束の間、次の駅大光里に停車すると、日本軍の九九式小銃で武装した朝鮮保安隊員が各車両に乗り込んできて、日本人は全員下車させられ駅前に集められた。我が方の代表者が保安隊と交渉の結果、鉄道沿線や幹線道は通らないという条件で開放され、山麓へ向かい山路へ入った。恐らく賄賂で話がついたのだろ

う。ところが一時間ほど進むと、丘のうえに建つソ連軍兵舎にぶつかった。陽が落ちるのを待ち、兵舎の灯りをうかがいながら、極度の緊張の中を声を殺し這うようにして丘の裾側を通り抜けた。

翌日の昼下がり、川沿いの道を進んでいると、突然に対岸で銃声がとどろいた。不意を突かれた人々は列を乱し、川原に駆け降りてうずくまった。浅瀬を渡ってきたのは、付近の部落の自警団の連中だった。銃をかざして所持品検査を始めたが、我々の代表者が応分の賄賂を渡して話をつけ、その場を切り抜けた。このように幾度か危機に遭遇しながら、二夜の野宿を経て、やっと越境のための渡河地点へ到達し道端で休んでいると、突然に自転車に乗ったソ連軍将校が追跡してきた。

一瞬北へ逆送されるのではないかと、我々の心は凍りついた。しばらく代表者と話していたが、幸い黙認するらしく「ドスピダーニヤ」と言って去って行った。安心して気を取り直した我々は、確かな足取りで渡河地点へ向かい、付近の部落の

農家に分宿して、北朝鮮最後の夜の眠りについた。渡航料はもちろんその夜のうちに支払われた。

翌朝、まだ明けやらぬ薄明かりのもとで、苦難の逃避行を続けてきた我々の集団は、粛々と渡河地点へと向かって行った。一艘しかない渡し舟は、すでに待機していた。十人ぐらい乗せては対岸に向かう。舟を待つて川原で過ごしていた。やっと我々の番がきて乗り込んだころには、夜は白々と明け始めていた。暗緑色の河水は、舷側をたいて舟体を揺るがすが、朝鮮半島を南北に分断して米ソが対峙する国境三十八度線を、今脱出しつつあるという緊張からか、舟上の人々は沈黙してしわぶき一つ発しない。舟は無事に対岸に着いた。

川原に降り立った人々は、感極まって砂上にひれ伏し泣き出す者、互いに手を取り合って万歳を叫ぶ者、「ソ連の馬鹿野郎！」と対岸に向かって悪態をつく者など、思い思いの動作をしながら幾多の犠牲を払い苦難の道を踏破して、やっそここまでたどり着いた感激を表していた。休む間もなく、

米軍の駐留する東豆川へ向かい、ここで簡単な所持品検査を受けたあと、旅客列車で京城へ運ばれ、東本願寺に収容された。米軍の方針により、日本人集団の同一場所二十四時間以上の滞在は禁止されているらしく、翌朝九時ごろには釜山行き列車に乗せられたが、車内は貨車だが寝そべることができるほどゆったりしていた。

夕刻、釜山駅到着。はやる心を抑えながら棧橋へ向かい、接岸している引揚船に乗船した。船倉の客室に落ち着き、やがて夕闇迫る中を船は静かに岸壁を離れ、一路博多へ向かった。デッキにいてもドラも鳴らず、テープが投げられることもなく、まさに敗残の民が祖国へ逃げ帰る沈黙の船出であった。

「内地だぞ！」「博多の灯が見えるぞ！」との声に起こされて、船内の狭い階段を駆け登ると、夜がまだ明け切れぬデッキには、飛び出してきた人々の歓声で埋まっていた。

防疫のため、十日ほど港外に停泊したあとに、

十カ月に及ぶ避難行に終止符が打たれて、六月二十一日祖国日本の土を踏んだときには、生きて帰った安堵感と、孫二人を無事に連れて帰ってくれた祖父母への感謝の気持ちと、亡き母への加護への思いが一度に込み上げてきて、放心したように身も心も震えたのを忘れない。

その日の夜行列車で故郷島原へ向かい、翌朝我が家にたどり着き、先に帰っていた父と再会できたが、幾山河を越え茨の道を踏破して幸運にも生還した故郷の夜は、不運にも異郷に斃れ、永遠に帰らざる人となった母と妹への悲憤と追憶のなかで静かに更けていった。

#### 六 引揚げ後の生活

帰国後とにかく復学せねばならぬと、転校手続きに行くと、三学年は一学期しか就学してないとの理由で三年編入と言われたが、父が教頭を説得して四年生として島原市立第三小学校に転校することができた。卒業後、新制の市立第二中学校に進学。しかしながら、財産のすべてを失い残って

いるのはこの家だけという我が家の生活では、楽なはずがない。そのうえに父は、「子供たちにとつて母親は一人であるべきだ」との信念を貫いて再婚もせず、鍋釜の販売や魚の行商などで母親代わりの祖母に助けられて、我々兄弟を育ててくれた。明治建国以来の我が国の「かたち」を築き上げてきた、祖父母と父たち明治生まれの人間の保護の下に、県立島原高校に進学、さらに長崎大学経済学部に進み、卒業後には生命保険会社へ入社、本社勤務の後福岡へ転任。当地で妻紀美子と結婚、娘二人をもうけた。妻と二人の娘を連れて、久留米、福岡、佐賀、福山で営業所長を、下関、松江両支社では次長を経験し、さらに大分、熊本、長崎では支社長となり、関連会社に専務として出向後、定年を迎え現在に至っている。

経済成長時代の戦士といえは聞こえは良いが、反面引越しのたびに妻にかけた苦労は大変なもので、いくら感謝してもしきれぬものではない。子供たちにも長女が小学校を三回、中学校を二回

転校、次女も小学校三回、中学校二回、高校二回転校させて苦勞をかけた。それにもかかわらず、長女は広島大学医学部総合薬科を卒業後、現在薬販会社に薬剤師として勤め、一児の母であるし、次女は短大卒業後、福岡の大手デパートの企画部に勤務し、結婚退職後、現在専門学校教師として勤務しており、一児の母である。父親の転勤に伴って転校の繰り返しだったにもかかわらず、よく頑張ってくれたと感謝している。

思い返せば、引揚げ以来五十七年の歳月が流れ、祖父は八十三歳、祖母は八十七歳、父は九十四歳で亡くなり、身内での引揚げ体験者は、弟とイサ子姉と久美子姉と私の四人になってしまったが、日本の敗戦が生んだ歴史の大きな転換を象徴する「北緯三十八度線」を越えて、大げさに言えば、歴史の試練を乗り越えて生き抜いてきた誇りと自負を風化させぬよう記録に止めておきたい。

最後に、母や妹をはじめ異郷の地に命を落とすた多くの人々の霊に、心より哀悼の意を表すると

共に、二十一世紀に生きる娘や孫たちには、「昭和」という時代が生んだこのような悲劇が再び訪れないことを切に願って止まない。

『平和の礎 海外引揚者が語り継ぐ労苦15』の訂正について

大分県 波多野保子「あかい夕日」

459頁 上段3行目

削除) 京城の

460頁 上段2行目

削除) 京城は

461頁 上段1行目

誤) 十七日になると京城市街の

正) 翌日からは外の

462頁 下段9行目

削除) 京城に残っていた日本人は

以上、訂正してお詫び申し上げます。